Sweet Fantasies！

― スウィートファンタジーズ！ ―

CONTENTS

カトレア・魅力の笑顔が望む未来(しあわせ) 3

モミジ・輝き得る一番の太陽 53

ネリネ・Re:護(まも)り手(て)の誓(ちか)い 67

トリカブト・トリカブトとおひるごはん' 123

トリカブト・千の過去(あくむ)を乗り越えて 151

はじめに

本書『スウィートファンタジーズ！』をお手にとって頂き誠にありがとうございます。作者の宮下翔一です。こちらの同人誌は以前花騎士夢想3にてリリースした『カラフルアレンジメント！』のコンセプトを受け継いだ短編集で、今作で花騎士同人誌も五作目になります。

今作は『恋』と『団長との物語』をテーマとしたもので、団長とのコンビストーリーを主軸にしています。それにともない、いつものバトル、シリアス成分よりも、恋愛気分を楽しめるような具合に仕上げました。またカトレア、トリカブトの物語はこれまで出した作品の後日談として見れるように設定を再構築しております。（無論本書単品でも楽しめるようにしています）

タイトルの由来は春奈るなさんの楽曲『Sweet Fantasy』から着想を得ました。この作品を作るに当たり何百回と聴いたお気に入りの曲で、カトレアたちの内面を描くに当たり強いヒントになった作品です。

戦いの果てに少女たちが手にした、甘い幻（スウィートファンタジーズ）のひとときたち。

どうか最後までお楽しみください。

宮下　翔一

魅力の笑顔が望む未来

魅力の笑顔が望む未来・登場人物紹介

カトレア

『世界に愛された』と評されるほどの才覚を発揮し、スプリングガーデンを害虫の魔の手から救おうと戦い続けた少女。団長とともにブロッサムヒル女王からの王命を受けて、『閉ざされた屋敷』で団長と幸せな日々を送る。
年上の男性である団長に対しては、ともに過ごすうちに憧れが高じて恋い慕うようになり、大切な存在と想うようになった。

団長

ブロッサムヒル王国に所属する独立騎士団〝セントフローレス〟の団長。王命で長期休暇を言い渡されたあと、カトレアの屋敷で執事として過ごすことを選んだ。
この物語ではカトレアと恋人になった未来をたどっている。

ブラックバッカラ

ウィンターローズ王国騎士団に所属する最強と謳われた花騎士。無反射加工の太刀と黒い和服を身につけている大柄な女性で、常に危険な雰囲気を漂わせている。団長の事を気に入っており、事ある毎に彼を酒の席に招こうとする。

デンドロビウム

ブラックバッカラがかつて救った幼いカトレアを育てた女性。カトレアを立派に育てる誓いとして桃色のメイド服を身に着けている。童顔であるが年齢は団長より上で、カトレアの事に関する相談役を引き受けることも。自身も花騎士であり、戦いでは魔力で強化した肉体を用いた対害虫用戦技を駆使する。

オンシジューム＆シンビジューム

カトレアの生まれ育った『閉ざされた屋敷』に幼い頃から遊びに来る少女たち。カトレアとは幼馴染の関係であり、彼女の持つ魔力の影響を一切受けない体質を持つ。カトレアと同じく〝セントフローレス〟所属の花騎士であり、オンシジュームは双小剣（ツインダガー）を、シンビジュームは重棍棒（メイス）を用いて戦う。

――朝、ね……

目を開くと窓から白銀の光が差し込んでいることに気付く。少女カトレアは朝焼けによって夢の世界から呼び覚まされた。艶やかな赤髪を揺らしながら体を起こすと、透けるほど薄いネグリジェの外側から冷たい空気が入り込んでくる。軽く伸びをした後で、サイドテーブルに置いてある置時計を見ると、いつも起きると決めている時間の数分前だった。狙い通りの時間であることから無意識に口元がほころんでしまう。

カトレアにとって一日の始まりを告げる夜明けの鐘は、この時計ではない。

もっと心地よく、優しく起こしてくれる愛しき人の声だ。

それを毎日の楽しみにしているカトレアは、置時計のチャイムに頼ることなくいつもこの時間に起きていた。そして、扉の向こうから足音が近づいてくることに気付く。カーペットの敷かれた廊下を歩く、革靴の音だ。

――来た！

再度首元まで毛布をかぶりなおして目を閉じる。すでに起きた姿を見られては、いつものように起こしてくれない。好きな人相手に狸寝入りをすることはなんだか騙すようで不本意なのだが、そうするだけの理由が自らを突き動かしていた。ほどなくして、ドアノブが回る音が聞こえた。

「おはよう。カトレア」

それを耳にしてカトレアはゆっくりと――至福の一時をしみじみと味わいながら――目を開いた。すぐそこにはこちらをまっすぐに覗く、若葉色を宿す切れ長の瞳があった。クセのある褐色の髪に、そっと触れてくるような優しい声。それらを持つ青年が自分の名前を呼んでくれる。

黒スーツ姿の男に対し、カトレアは非常に満たされた気持ちで呼んだ。

「うん。おはよう……団長」

彼は花騎士（フラワーナイト）として戦ってきた自分をいつも支えてくれた人。そして――この『閉ざされた屋敷』に自分と一緒に過ごすことを決めてくれた人。愛しい人の呼び名を口にして、カトレアはすっかり自然に出せるようになった笑顔を浮かべる。

これが、今のカトレアの朝。屋敷に執事として過ごすことになった、団長とともに迎える朝。愛する人と一緒に過ごす。夢にまで見たその未来に満たされながら、カトレアは彼に手を引かれてベッドの外に出た。

「おっはよーう！　ご飯はできてる？　ご飯はできてる？　今日も朝ごはん食べに来たよー！　団長ッ！」

「はいはい、急かさないの。今日も元気ね、オンシジュームは」

勢いよく開かれた食堂の扉をくぐり、いつにも増して明るくキッチンに叫ぶ親友の姿に対し、

カトレアは穏やかにたしなめる。山吹色のドレス姿の少女、オンシジュームはニカッと笑み返した後で流れるようにテーブル前の椅子に座った。そこは毎日のようにこの屋敷に遊びに来る彼女の定位置だ。

「オンシジュームちゃん、団長さんが来てからずっとだけど、毎日朝からご馳走になるのはよくないんじゃない……？」

その後に続いて、眼鏡をかけたボブカットの少女が慌てるようにオンシジュームへ呼びかける。シンビジュームだ。彼女もまたカトレア、そしてオンシジュームの幼馴染（おさなじみ）で親友だった。

「私たちの分までいつも用意してくれているけど、このままじゃ団長さんが大変なんじゃ……」

困り顔に対し「だってぇ～」とオンシジュームが抗議しようとしたとき、キッチンの奥から桃色のメイド服を身に着けたツインテールの女性が姿を現した。

「それ以前に。オンシジューム、屋敷の中で間で走り回るのはおよしなさい。食事にホコリでも入ったらいけないでしょう？　いつまで子供気分なのですか。……シンビジュームも友人であるなら、マナーの至らなさをもっとはっきりキッチリ怒ってあげるべきです。あんまり度が過ぎると、団長さんに貴方たちの分を抜くように言いますよ」

団長とともに朝食を作っていたメイド、デンドロビウムだ。自らを育ててくれた彼女はカトレアにとって母親にも等しい存在であり、花騎士（フラワーナイト）としても尊敬すべき大先輩の戦士だった。

「そ、それだけは勘弁してよ～！　団長さんのごはんって、レストランの料理よりもずっとおいしいんだから～！」

さすがのやんちゃ少女も、師匠である彼女の言葉に対しては笑ってごまかす気概（きがい）もないらしい。デンドロビウムはオンシジュームにとってもシンビジュームにとっても花騎士（フラワーナイト）の戦い方を教わった相手であり、とても逆らえるような相手ではない。

「でもデンドロビウムだって団長の料理にメロメロでしょ！　お腹が空いてたまんなくなるこの気持ち、絶対わかると思うッ！」

「それとこれとは話は別です。淑女たるもの、いつでも品位を保つのが礼儀と言うものです。そこになおりなさい」

――あらあら、今日もやってるわね……

その様子を眺めていたカトレアの目の前で、デンドロビウムによる説教が始まった。そこから少し後ずさった所で、シンビジュームが落ち着かない様子でわたわたとしている。

「それくらいにしとけって、デンドロビウム。今日も折角来てくれたんだし、落ち込んでたらおいしいはずのごはんだって食べられないだろ」

それをさえぎったのはエプロン姿の団長だ。彼はキッチンから出てくるなり、テーブルの上に用意していた鍋敷きの上にそっと鍋を置く。絶えず湯気を出すそれには濃い琥珀（こはく）色のスープが入っていた。

「あら、できたのね」
漂ってくる香ばしい香りを感じながら、カトレアはそうつぶやいた。彼は自信ありげにこの場のみんなに対して豪語する。
「お待ちかねのブレックファーストだ。たくさん作ったからじゃんじゃん食べてくれ」
今この屋敷において料理を担当しているのはもっぱら彼だった。もちろん一番に配られる相手は屋敷の主たるカトレアだ。前はデンドロビウムが普段の雑用に加えて食事係も兼ねていたが、この屋敷の執事となった団長が彼女から仕事を引き継いでいた。デンドロビウム曰く、彼の作る料理は城のコックとも遜色ないとか。
「へえ、オニオンスープ？」
前に出された鼻孔をくすぐる香ばしい香りに対して問う。
「ああ。たしか気に入ってたよな」
「まあね、いただくわ」
なんでもないようにそう答えるが、その実、カトレアの心は跳ねていた。今日はスープ。大好きなこの人が作ってくれた、大好きなもの。寒いこの国で育ったカトレアにとって、体を芯まで温めてくれるスープは大好物だった。コンソメの香りと、よく煮込まれた玉ねぎの香りがお腹を刺激してくる。もう待ちきれない。
「うん！　いっただっきまーすッ‼」

そんなカトレアの心を代弁するかのように、オンシジュームが嬉々として朝食にありついた。豪快にサンドイッチをかじり、スープを口に運ぶ。一拍おいてカトレアも同じようにテーブルへ手を伸ばす。

「おいっしいー！」

――うん、おいしい。

オンシジュームの言う通りだ、彼の料理はおいしい。元々彼は世界花に団長に選ばれるまで、王城のコックを志望して故郷から出てきた男だった。子供のころから食べてきたデンドロビウムの料理も美味しいのだが、料理の腕前なら専門的な勉強をしてきた彼の方が断然に上だった。

「……もしかして、味を少し変えた？　前より良くなってるような気がするわ」

「ああ。いつものと調味料を変えてみた。それで分量が変わったりしたんだけど……そう言ってくれると研究した甲斐があるってもんだよ」

「もう。いちいち手間ひまかけすぎ。無理して体調崩しちゃイヤなんだからね」

凝り性の彼の口に人差し指を当ててつぐませる。職人気質と言うものなのだろうか。数日前からキッチンが夜遅くまで明るいと思っていたら、一人で味の研究をしているとは思いもしなかった。しかし彼の自信は確かであり、オンシジュームはガツガツと、シンビジュームとデンドロビウムは黙々とスープを味わっていた。三人ともその顔に笑みが宿っており、幸せそうなのがわかる。明らかに食べる量もいつもより多い。

ひょっとしたら自分だけなのだろうか。気恥ずかしさから嬉しい気持ちを隠して食べているのは。顔が柔らかくなるのをこらえているのがバカみたいだ。

そう思った後で彼から目を背けながらサンドイッチに手を伸ばした。みんなに食事を出し終えた団長もまた、「俺も食べるか」と言いつつエプロンを外して席に座った。しばし、みんなで笑いあいながら朝の団らんを楽しむ。ほどなくして食事が終わり、おのおのがリビングでくつろぎ始めているころ。カトレアはふと壁に掛かったカレンダーを眺めた。

――もう半年になるのね。団長がここで暮らし始めてから……

そんなことに気付く。それまで自分たち屋敷の人間は彼の指揮下の元、騎士団〝セントフローレス〟に所属する花騎士（フラワーナイト）として害虫と戦い続けていた。

今はこの屋敷で平和的に過ごしているが、戦いはまだ終わってはいない。

本来なら戦士である自分たちはこうして平和な一時に甘んじていることもないはずである。しかし今は騎士団の属する国家、ブロッサムヒルの女王より一年間の長期休暇を言い渡されていた。数々の戦果が評価され、来るべき決戦まで戦力を温存する必要があると考えたブロッサムヒル女王が、戦力の要となる自分たちに対して『英気を養え』と告げたのだ。

そして訪れた、幸せな一時。

今が仮初めの平和でいずれ終わるとしても。こんな幸せな毎日を団長と、みんなと過ごせることが今の最高の幸せだった。

「お昼すぎに今日の分のお稽古にしましょう。それまで自由にしていなさい」
「はい、師匠。……私は図書室で読書してるけど、オンシジュームちゃんは？」
「食後の運動！　マイドアリと一緒に近くを駆けまわってくるね～！」
「最近は天候も変わりやすいですから、あまり遠くまで行ってはいけませんよ」
「わかってるって！　花騎士（フラワーナイト）オンシジュームをなめないでよねー！」
デンドロビウムは思い思いの返事をしてくる二人の様子を見送った後で、先にキッチンで食器を洗っている青年の横に並んだ。
この『閉ざされた屋敷』でメイドとして、給仕を長年担当してきたのはデンドロビウムだ。普段身に着けている桃色のメイド装束も、赤ん坊のころからこの屋敷で暮らすこととなったカトレアを一人前の女性として育て上げるための決意の衣服である。
まさか、自分の役割のいくつかを隣にいるこの青年に奪われるなんて思いもしなかった。
「ホント、あの子たちはいつまでも元気なんですから」
「そんなこと言ってるとホントお母さんみたいだぞ。……でもあれぐらいがちょうどいいんじゃないか？　花騎士（フラワーナイト）は元気が一番だ」
「もちろんそうですけど、時々ついていけなくなるというものです」
振り返ることもなく、手を動かし続けて会話する。ふと、彼の横顔をちらりと見た。初めて

会ったときと比べると、彼の面持ちも精悍で皆を取りまとめるに相応しい貫禄をまとうものになった。彼と出会ってからそろそろ三年が経つ頃合いだろうか。デンドロビウムは一昔前の思い出を想起しながら、残りの食器を片付けていく。

『俺が団長だ。今日からお前たちを俺の騎士団で預かることになった。よろしくな』

あの時の彼はスーツ姿の今とは違って、紺碧色の騎士服に身を包んでいた。紺碧はこの世界を照らす、清き空の色。それが自分たちの属する〝セントフローレス騎士団〟のイメージカラーだった。

そして世界花の啓示を受けた団長は国から、短い期間で精強な騎士団を創り上げることを命じられた。そして形にしてみせた。

彼は使命を達成するために、自分たち『閉ざされた屋敷』の花騎士を引き入れたのである。デンドロビウム自身と、そしてデンドロビウムが手塩にかけて育てあげたカトレア、オンシジューム、シンビジュームは、並の花騎士とは一線を画した実力を持つ。そして高い戦果と優れた功績を上げ続けたことで、自分たちの騎士団は、多くの花騎士を従える規模に成長することができた。

しかしそのために団長は疲弊していた。元はただの民間人であり、三年間休む間もなく花騎士たちを率いていた彼にのしかかった負担は、精神面でも肉体面でも非常に過酷だったと聞く。

そこに助け舟を出したのがブロッサムヒル女王であり、王命を下す形で休暇を言い渡したのだ。王からの命令を拒否することは許されない――デンドロビウムは謁見の間で告げられた厳かな言葉を受けていた団長の姿を最後に我に返る。

多くの人間たちに必要とされる彼が、こんな辺境の屋敷で隠れるように住むことになったのはそういう経緯があったからだった。

だが、今のスプリングガーデンは彼を抜いた上でも着実に害虫に対抗するすべを身に着けている。

それは彼を初めとして世界中で団長として選ばれた者たちが、迫りくる害虫の脅威に立ち向かう意志を持ち始めたからだ。

今もきっと戦えない人たちのために、世界のどこかで花騎士と団長が命を燃やしている。

それを終わりにするために、スプリングガーデン各国は一年をかけて害虫の発生源となる亡国――コダイバナへの大規模侵攻計画を水面下で進めている。半年後、再び自分たちは最前線で戦うべき戦力として呼び戻される手はずとなっている。

その全世界の花騎士を集めた戦いこそ、自分たちの未来の行く末を分ける運命の戦いだ。負ければ当然自分たちだけでなく、同胞である花騎士と無辜の命が根こそぎ害虫に奪われる。ある意味では、この休暇は生きるか死ぬかの瀬戸際に向かう前の猶予期間とも言えた。

そして、団長がこの屋敷で働いているのは彼自身が望んだことだった。

彼はこれまで不眠不休同然の働きをしていたのだから、初めはデンドロビウムたちも反対した。彼は英雄だ。もてなされるべきではあっても、彼がこれ以上身を費やす必要はないのだと。が、彼は「暇なんだしやらせてくれ」と口にしてばかりで、かたくなに譲らなかった。

戦災孤児の彼は、子供のころからコックとして働くことが夢だったらしい。団長に選ばれてからその夢が消え失せてからも、未練をずっと持ち続けていたようだった。故郷も害虫たちによって奪われたらしく、彼に与えられた帰るべき場所と言えるのはブロッサムヒル城内の執務室か、宿舎にある団長専用の一室ぐらいだけ。

カトレアが『私の屋敷に住みなさい』と彼の望みを汲み取ったのは、彼のしたかったことをやらせてあげたい想いもあったのだろう。

――数年前の私なら、他人を屋敷に招き入れることなんて絶対に反対していたでしょうね。

デンドロビウム自身、カトレアに対して自分は過保護だと自覚している。

愛娘同然の彼女がいる自分たちの屋敷に、他人を――それも男を招き入れるのは本来気が気でいられない事だ。しかし、今はむしろ彼がいることで安心していた。彼は唄うように軽口を出す飄々（ひょうひょう）とした性格だが、誠実だ。そしてカトレアが彼に惹かれていたことも理解している。

ささやかな抵抗として家事がどれだけできるが課題を出してみたが、それすらも彼はあっさりクリアしてしまった。

「貴方が来てくれてから、カトレアもずっと幸せそうで……本当に助かります。あの子にはい

つまでも笑っていてほしいから……」

心からの言葉を告げるが唐突すぎたのか、彼は戸惑いの声を上げたあとで静かに言い返す。

「ああ。でも特別感謝されることじゃないよ。俺だって、カトレアのそばにいたいからあの子の誘いに応えたんだから。正直、ここのみんなと一緒にいるから城の頃とあんまり身の回りが変わった感じもしないし、気楽でいいよ」

彼がこの屋敷に移り住んでからも、自分たちは彼を例外なく『団長』と呼ぶ。すっかりその呼び名が定着したというのもあるが、彼自身がそう呼ぶことを望んだのも大きかった。曰く、名前で呼ばれるのは気恥ずかしいとか。

彼と話しながらする家事は悪くない。退屈せずに済むからだ。自分と同じ目線を持つ大人の話し相手がいるというのは気分がいい。ウィンターローズ王国騎士団に在籍していたころは他人と口を交わす気もなかったが、最近の自分はそうでもない。むしろコミュニケーションをとることは目的を果たす手段としても有効だと理解している。

そんな風に会話しているうちに食器はすべて片付いた。二人してエプロンを脱いで、彼の分を受け取る。この後は洗濯だ。

「そういえば今夜ですけど、もちろん忘れていませんね」

「何のことだ？」

「決まってます。今日はカトレアの誕生日なのですよ？　あの子の笑顔が見たいって、プレゼ

ントを用意すると言い出したのは貴方じゃないですか」

人差し指を立てながらそう伝えると、団長は肩をすくめる仕草をした。

「ならそういってくれよ、もちろん覚えてる。……ブラックバッカラにプレゼントを用意させているから、これから馬で取りに行くよ。デンドロビウムたちは屋敷に残っていてくれ」

「しかし、やはり単身で雪原を超えるのは……」

デンドロビウムの心配はそれに尽きた。この辺境の地にある屋敷からウィンターローズ王都まではそれなりの距離があり、道中には害虫も生息している。馬の速度なら虫たちを振り切ることも可能ではあるが、万が一の心配を拭いきれなかった。

「今夜は天気も悪くなるかもしれません。せめて私か、あの子たちのどちらかだけでも貴方の護衛に……」

「雪原を迂回して、害虫が出ない安全な交易路を通るつもりだから心配するなって。それに、屋敷のみんなは王都で目立つだろ。すぐブラックバッカラに会って戻ってくるから、大丈夫さ」

自分たち『屋敷』の花騎士（フラワーナイト）四人は、戦果を挙げてきたために世間からの視線を集めてしまっている有名人だ。それによって、誰一人としてうかつに王都を出歩くわけにもいかなくなった。そのため、団長が自ら王都に出向いてブラックバッカラと会うようにしているのだ。人々の注目を集める英雄的存在の花騎士（フラワーナイト）とは違って、騎士服を身に着けてすらいない男性は興味の対象になり得ない。

そしてカトレアは『世界から愛されている』奇跡の少女だが、『自国の王城の人間から疎まれている』少女でもあった。生まれつき極めて恵まれた魔力を持つ彼女は、不運にも親から引きはがされて国に殺されるはずの運命にあった。『カトレアの誕生日』も正確には彼女の生まれを祝うために、自分たちが『カトレアと出会った日』を言い換えているだけに過ぎない。

そして、団長の口にしたブラックバッカラという女性はデンドロビウムの親友であり、カトレアがまだ赤ん坊だった頃の命の恩人だった。

しかし彼女自身は王国側の人間であるため、カトレアに降りかかる不幸を避けるためにカトレアに会うことを自ら避けている。それでも物資をこの屋敷に送ったり、カトレアへのプレゼントを用意するあたり、ブラックバッカラのカトレアに対する愛は本物であった。それこそ、本物の母親か父親以上に。毎年カトレアの誕生日には彼女からのプレゼントがこの屋敷に届く。カトレアがいつも身に着けている金の髪飾りもまたその中の一つだ。

しかしながら今年は任務が忙しいらしく、プレゼントの用意が遅れたらしい。団長がわざわざブラックバッカラの元へ行くのは彼女の都合に合わせるためだった。

「じゃあ行ってくる。三人を頼むな」

団長はいつもの陽気な調子で言いながら、廊下の奥へと消えていく。

大丈夫、彼なら安心だ。余裕を崩さない彼はいつだって花騎士たちとともに、戦場の困難を潜り抜けてきたのだから。

しかしなぜだろうか。今日は何かが起こりそうな気がする。女の勘というものかもしれない。

数分悩んだ後。デンドロビウムは小走りで彼の背中を追いはじめる。「やっぱりついて行く」と彼に言うつもりだった。しかし、納屋に向かうとすでにもぬけのからだった。雪が舞う外の大地に、馬の足音が続いている。

「……無事に帰ってきてください、団長さん」

胸元で拳を握りしめながら彼の向かった道を見据える。今の彼は自分たちの誰にとっても大切な存在だ。デンドロビウムは彼の身に何も起きないことを心から祈った後で、静かに屋敷に戻った。

「まだこないのかよ。女を待たせるとはいい度胸だ」

王都西門のやぐらの上で、ブラックバッカラはそうぼやきながら銀世界を眺めていた。

団長と会う約束をしたとき、かれは正午に来ると言っていた。しかし、時計の長針はとっくに半時を過ぎている。予定よりも早くこの場所で待っていただけに、僅かな失望が心に広がる。

――これじゃまるで恋でもしているガキみたいだな。男を今か今かと待ち望むなんぞ……

ガラにもなくそんなことを考えてしまう。初めて彼に会ったのは、彼が『屋敷』の少女たちの存在を求めて自分のもとに訪ねてきた時だ。口を開けば「カトレアたちを自分の騎士団に引き入れたい」の一点張りで、あの時は何度斬り捨ててやりたいと思ったことか。

そんな男が、今では自分の知る限りもっとも信頼できる男となっている。そして彼は、普段会うまいと決めている屋敷のみんなの様子を聞かせてくれる貴重な情報源だ。彼の話が待ち遠しいばかりに、今回もお気に入りのバーを予約してしまった。彼が来たらいつも行く路地裏にある酒場だ。

そんなことを考えていると景色の中に一点、栗色の馬とそれにまたがるコート姿の男の影が見えた。団長だ。彼は特に異常もなくこちらへと来ている。遅れていたことから害虫に襲われたのかもしれないと思ったが、どうやら心配は無用だったらしい。

ブラックバッカラはやぐらを降りて、門の兵士に「後を頼む」と言い渡す。元々今日は非番だが、彼を待つために場所を借りていたのだ。門の外に出て青年を迎える。ほどなくして、団長はブラックバッカラの目の前で馬を止めて、手慣れた様子で降りてきた。

「待たせて悪い、思った以上に遅れた」

「おせぇんだよ団長。なんともなかったか？　害虫に出くわしたりとか」

「平気さ。心配かけたな」

「うるせえ。久々に会ったんだから開口一番に詫びなんか入れんなよ、辛気臭い。……とにかく冷えただろ、いつもんとこに行くぞ。カトレアへのプレゼントもそっちに預けてある」

バーのことを口にした途端、団長は怪訝な顔を浮かべて問い返してくる。

「昼間っから酒か……？」

「今日はカトレアの誕生日。めでたい日なんだからこまけぇこと気にすんなよバカ。それとも何か？　アタシの酒が飲めねえってのかァ？」
「飲んだくれのオヤジみたいなこと言うなよ……わかった、付き合うって」
「へっ、それでこそアタシが見込んだ男だ。大丈夫だって、そんなにグイグイいかしゃしねぇよ」
「はいはい」
背中を何度もたたきながら密着すると、彼は照れたように顔を赤くする。
「そんなベタベタ肩に腕を回すな。胸を押し付けんな」
「あててんだぜ。照れんなよ？」
「照れるかッ！」
門番の少女に別れを言った後で、ブラックバッカラは団長とともに門をくぐった。二人で往来を歩いていた後で路地裏に入り、目的地のバーにたどり着く。ここは昼の間は会員制であり、中に入ると自分たち以外に客は誰一人いなかった。手近なテーブルに向かい合う形で座る。
「いつもの」
「俺はカクテルを――」
「んだよ、女々しいな。少しはアタシに付き合えって。ビールとかさ」
「苦いの苦手って言ってるだろ。無理強いしてるとますます酔っぱらいのオヤジっぽいぞ」
「生意気言いやがって、コノヤロ」

二度も飲んだくれ扱いされるとさすがに少し腹が立つ。花騎士（フラワーナイト）として鍛え上げた体をフル活用させて一瞬で彼の横へと回り込み、すかさずその首を左脇に挟んだ。空いた手で彼のこめかみをグリグリとする。ついでに自慢の胸もコイツに押し付けてやる。苦しそうにしているのが愉快で仕方ない。

「あたしにナマイキ言うなんざ一千万年早いのさ。もっと痛い目に合わせてもいいんだぜ」

「アンタな、俺をガキ扱いするのはいいけどもう少ししおらしく出来ないのかよ。胸まで押し付けてはしたないぞ」

「お前みたいな年下にんなこと心配されるいわれはねえよ。……ってか、胸を気にするなんてウブだな。もしかして嬉しがってんのか？」

「気にするかって、そんなの」

割と本気で抵抗しているのでほどほどにしてやる。彼を手放して再び向かい合うと、機を見計らったように店主の女性が冷水の入ったグラスを置いてきた。この気の利く店員がいることもお気に入りである理由の一つだった。不必要にこちらの事情を詮索することもないし、たまに一人で飲みに来るときには話し相手にもなってくれる。

認めたくないが、何かしら孤独を紛らわしたいときにここはあまりにも適していた。いくら騎士団の中で『嫌われ者』と罵られるブラックバッカラでも、逃げ場やより所となる場所がないと日々の鬱憤が貯まるばかりだからだ。

「はは、悪かったよ。……っと、忘れないうちに渡しておかなきゃな、プレゼント」
店主を呼び出し、預けていた物を出してもらう。丁寧に渡されたのは指輪の化粧箱だ。それを「ほらよ」と団長に投げ渡してやる。団長は中身を空けたあとで、まじまじと輝いているそれを眺めだした。
「……これ、買ったのか？　だいぶ高そうに見えるが」
「オーダーメイド、ってやつだ。そいつは任務の時に手に入れた魔力水晶を加工したやつでさ、知り合いに職人がいるから仕上げてもらったんだ。おかげで数ヶ月分の金が消えたぜ」
箱の中に納まっているのはランの花を模した装飾が施されている指輪だ。ほのかに自ら赤く輝く水晶の光に、彼はしばしあっけにとられている。その後で団長はとっさにポケットに手を伸ばし始めた。
「俺も出す。いくらした？」
「いらねえよ、アタシはケチケチしない主義なんだ。カトレアへのプレゼントなんだから黙ってもってけ」
両手で団長の手にしっかりと箱を握らせる。この男は普段は飄々（ひょうひょう）としたやつなのにこういう場面では真面目になって、遠慮するタイプだ。
そういうところが気に入っているのだが、照れくさいから絶対に口には出さない。
「お待たせしました、注文の品です」

ちょうどその時、待ち望んでいた酒が自分たちの前に置かれた。お気に入りの黒ビールと、団長が頼んだ青いカクテルだ。

「さあ飲もうぜ。付き合ってくれたらおごりにしてやるからさ。その方がお前もいいだろ？」

「……そうだな」

乾杯の合図をしたあとで静かに酒を口にする。その後で互いに近況を教えあった。ブラックバッカラは王城と近隣国、そして近頃危険と噂されている害虫に関する情報を伝えて、団長は前に会ってから屋敷で過ごした日々の事を伝えてきた。

「――なるほど、ずいぶんと楽しそうじゃねえか。お熱いようで安心した」

そう言いながら団長の柔らかい顔を見て思う。いずれまた、彼らは再び命を賭けなければならない。それまで限られた時間を幸せに過ごせるのなら、思う存分にさせてあげたい。彼らが休んでいる間、代わりに自分のような人間が頑張ればいいだけのことなのだから。

そう話しているうちに思い出したことが一つあった。「そういえば」と前置きしたあとで彼に問いただしてみる。もちろんカトレアに関わることだ。

「そういやお前とカトレアって、恋人としてうまく行っているのか？」

「なんのことだ？」

「とぼけんなよ。どこまで関係は進んだのかって訊いてんだ。もう手は出してんだろ？」

聞かれた団長はわずかに目を伏せたあと、小さく唸ったあとで答える。

「……いや、特には」
それを聞いてブラックバッカラは耳を疑った。
「はあ？　お前ら、屋敷のひとつ屋根の下で過ごしておいてそれか？　何もなかったのか⁉」
「声が大きい、ブラックバッカラ」
「じゃあなんなんだよ、今のお前らは。まさか本気でこれからも主人と執事ごっこを続ける訳じゃねえよな？」
口元の前で人差し指を立てる仕草をする団長だが、生憎今ここには口の堅さに定評のある店主と自分たちしかいない。さらに詰め寄る。
「あのな……お前ら恋人だろ？　お盛んな歳頃の男女だろ？　思春期迎えたばかりのウブガキじゃあるまいし……そういうのも分かった上でアタシやデンドロビウムはお前を屋敷に住むことを許したんだぜ？　さっさとやることやっちまえばいいじゃねえか。いつまでもそんなんだと向こうからカイショウナシって思われるぞ」
お世辞にもカトレアは人間として――花騎士（フラワーナイト）として社交性のある少女とは言えない。そんな彼女に対し彼は、団長として、大人として優しく接し、上に立つものとして導いてきた。ずっと支えられたカトレアが彼に想いを寄せるのは当然と言える。
そして団長もまた、そんなカトレアの好意を受け入れたからこそ傍にいることを決めたというのに……二人が半年間も同じ家で過ごして、ほとんど関係が進んでいないと聞けば呆れるし

か無かった。
「じゃ、どうせなら今夜から今以上の関係に進んでみなって。今日はカトレアの誕生日なんだし」
「……あえて訊くぞ。どういう意味だ？」
「にぶいな、言葉通りだよ。パーティでも済ませたらさ、アイツの部屋に忍びこめって。そして襲いかかるんだ」
「それって夜這いじゃないか……！」
「あったりめえだろ？　なあに心配すんなって。あんな性格だから最初のうちはイヤイヤ言うかもしれないけど、それも好意の裏返しだから」
「……あのなブラックバッカラ。俺たちは恋人同士でも来年にはまた戦場に出る団長と花騎士だぞ？　その……そんな事して身重になったりしたら色々まずいんじゃないのか？」
「構わねえよそれくらい。そんな事気にしてちゃいつまで立っても恋人になってる意味がないぜ？　……ははーん、もしかしてお前、ひょっとしてそういうのに自信ないのか？」
そこまで言ったところで、ムッとした様子でカクテルを飲んでいた団長が勢いよく噴き出した。彼がとっさによそを向いていなければ、確実に大量の液体が顔に降りかかっていたところだ。
「あ、アンタ何言ってんだよ！　そんなこと、平気で平然と！　俺はあの子とはそのうち—

――！」
「悠長なこと言ってんじゃねえ。今の御時世、ガキ同士で進んだ関係になるなんて珍しくないだろうが。……生きているうちに恋人らしいことはさっさと済ましちまえ。できなくなってからじゃ遅えんだよ」
「……アンタの言いたいことはわかるけど……頼むから、カトレアの前でそんな事言うなよな」
「わかってるって、ああ見えてアイツも繊細だからな」
店主から渡してもらった雑巾で壁を噴きながら彼は言う。彼なりの考えがあっての事なのだろうが、その踏ん切りの悪さを歯がゆく思う。
「ま、どうしてもお前が男として自信がないっていうんなら……アタシで練習するか？」
「……はあ⁉」
「お前さえ良ければ付き合ってもいいぜ。カトレアのことを愛しているお前となら、『何があっても』遊びで済むしな」
「冗談はよせって。そんな気はないし、みんなが知ったら悲しむだろ」
「まあな……それで万が一お前がアタシの体に虜になってなびけば幻滅するしな」
「しないって」と苦笑したあとに、団長は神妙な面持ちとなる。それからしばらく他愛もない話を繰り返したあとで、意を決したように団長が話を切り出してきた。
「なあ、今日のパーティだけどさ。……やっぱ、アンタも来てくれよ」